

福沢桃介記念館

富豪兼雅客の別荘

この建物は、日本で最も有名な起業家のひとり、福沢桃介の別荘です。慶応大学の創始者、福沢諭吉という有力な義父の支援により、桃介は日本の大学卒業後にアメリカに留学することができました。アメリカでは2年半にわたり、英語を学びながらペンシルバニア鉄道の見習いとして働いていました。21歳の時に帰国すると、北海道炭礦鉄道で働くようになり、この会社の株に投機したため、最終的には巨額の富を得ることになります。桃介は1909年までに北海道を去り、名古屋電灯の大株主になり、1914年にはこの会社の代表取締役役に就任しました。

木曽川の勾配と、力強い水流を見た桃介は「一河川一会社主義」という概念を思いつきました。桃介は、どの川にとっても最適な水力発電量の活用方法は、ひとつの会社がすべての権利を持つことだと考えていました。

桃介は、読書発電所（1922年竣工）、柿其水路橋（1923年竣工）、大井ダム・発電所（1924年竣工）などの複数の事業を監督していた1919年にこの別荘を建てました。桃介は複数の会社に出資しており、木曽川の流域の6基の発電所の建設を手掛けていました。桃介と愛妾は、この別荘で豪勢なパーティーを開き、政治家、実業家や外国人技術者らをもてなしました。

この家の見どころを以下にご紹介します。

1 階

川上貞奴の写真

芸者、女優、そして起業家だった貞奴は、桃介の愛妾でもあり、また事業上のパートナーでもありました。ふたりは、思い悩む桃介の妻を東京に残し、ここで一緒に生活していました。

河原の石でできた応接室の暖炉

地元の日本人建築家は囲炉裏については熟知していましたが、西洋風の暖炉には明るくありませんでした。これこそが、このマンツルピースが熱により大きく歪んでしまった理由なのかもしれません。

2 階

この家の2階は、1959年の火事で焼失し、その後再建されました。小さな部屋、低い天井やふすまが備わった和風建築で設計されています。このように、広々とした西洋風の客間と、小さく居心地のよい家族用の和室が備わった構造は、大正時代（1912年～1926年）の建物には珍しいものではありませんでした。

桃介と土地の人々との間の水利権の交渉に関する資料が展示されています。木曽川流域で桃介が行った事業を表す美しく彩色された地図にご注目ください。この地図は、古い浮世絵のように見えるかもしれませんが、1937年に作成されたものです。

2階の廊下には、近くにある桃介橋の最初の図面や、建築中の橋の写真がいくつか展示されています。桃介橋は、この家の裏から見ることができます。桃介の会社の従業員用住居は、今では学校が建っているこの家の前の敷地に建っていました。